

史料報

第 29 号

昭和53年 9 月

九州の石炭礦業史料について

秀 村 選 三

(九州大学教授
当館評議員)

目 次

九州の石炭礦業史料について

秀村選三……(1)

「眞田家文書」の整理を終って

原島陽一……(4)

史料とラベル

原島陽一……(7)

近世史料目録の調査・収集報告……(9)

受贈図書

(12)

集 報

(16)

—

もともと私は近世農村史を中心に研究を続けてきた者であって、石炭産業史の専門家ではない。もともと北部九州の古文書には屢々焚石・石炭に関する史料を見出すので、それなりに関心はもっていた。しかし、もしも石炭産業が繁栄を続けていたら、私は恐らく石炭史料に今ほど熱心になることはなかったであろう。

オイル・ショックで国民一様にエネルギー問題の重要さに気付いたけれども、既にその前に吹き荒れたエネルギー革命の嵐はすさまじかった。戦後復興、傾斜生産のチャンピオンであった炭礦の灯が次々と消え、人が去り、まさかと思っている間に筑豊炭田から炭礦は全く姿を消して

しまった。今や九州全体でも残るは

数礦のみで、九州の社会経済構造は激しい変容を受け、いまだにその傷にあえいでいる。炭礦の潰滅は、私の歴史体験として敗戦大日本帝国崩壊に次ぐ大きなものであった。今迄石炭の専門研究者と思っていた人達が石炭研究から転進してしまったことに對する義憤めいたものや、歴史家として何かしなければいけないのではないかという焦りが「筑豊石炭礦業史年表」の編集という、今思えば向う見ずな、しかしやむにやまれぬ作業に私をのめりこませ、民間・学界の同志たちと共に数年間、多数の資料と巨大な歴史の事実を前に一進一退の塹壕戦を継続させることになったが、この間石炭の巨大さは骨

身にこたえた。石炭とはまさに近代そのものであることに気付いたのは年表編集をはじめて二年近くの頃であった。もし我が国に石炭が産出していなかったら、我が国の近代化、工業化は著しく異なった様相を呈していたに違いない。

年表編集の間も石炭史料の散佚、消滅は烈しかった。年表編集のため既知の史料・文献を読み、綱文を作りながら、他方では散佚に瀕する史料に常に心をくばらねばならなかった。地方の研究者の数の少なさを痛切に味わったものである。唐津満島の石炭問屋の家を訪ねた時、少し前に数日かかって文書を焼いたことを告げられたこともあった。また筑豊の著名な炭礦業者の邸宅が売却され、業者が改造中にお蔵の中に入れてもらい、什器調度を持ち出されたあと、書類が散乱し写真や日記が土足に踏みにじられたなかで目ぼしいものを拾い集める作業をし、大廈の崩れる日を如実に感じた日もあった。

昭和四八年末に「筑豊石炭礦業史年表」は完成、刊行されたが、委員一同の熱気と努力にもかかわらず、決して満足のゆくものではなかった。今一度初心に立ち帰り、史料を一つずつ学び直し、事実を確定してゆかねばならないことを思い知らされたのである。そのため「九州石炭礦業史資料目録」を編集して、史料の所在、内容、点数を明確にし（現在第4集まで刊行）、「エネルギー史研究ノート」を編集して基礎的な事実を把握することに努めるようになった（現在No.9まで刊行）。熱気だけではどうにもならない世界があり、腰を落着けて史料に事実に取り組みはじめたのである。

そうした中で既知の石炭史料のほかに、新しく各地の石炭史料も明らかになってきた。我々は一八世紀以降現代に至るまでを調査の対象として採録を続けているが、ここでは江戸・明治期の石炭史料について窺ってみよう。

筑豊炭田については遠藤正男氏が戦前に先駆的研究をしているが、その基礎史料は筑前国鞍手郡四郎丸村古野家文書、遠賀郡修多羅村楠野家文書であった。ともに大庄屋、前者は明治中期京野炭坑の経営史料、後者は福岡藩の焚石会所仕組に関する史料として著名である。いずれも九州大学九州文化史研究施設に架蔵されている。このほか筑豊の大庄屋・庄屋層は福岡藩の焚石仕組や小倉藩の赤池会所に關与し、また明治前中期にかけて石炭の借区、採掘、取引等に乗り出していることも多く、村方史料の中に石炭関係の史料を多くとどめている。主要なものを挙げると、筑前では末松家文書（旧遠賀郡陣原村末松寛蔵氏、同分家九万生氏蔵）・田代家文書（同楠橋村田代静江氏蔵）・加藤家文書（旧鞍手郡上境村加藤太郎氏蔵）・飯野家文書（同山部村飯野精一郎氏蔵）・石井家文書（同金岸村石井邦太郎氏蔵）・吉柳家文書（同宮田村、現在松崎武俊氏蔵）・有松家文書（旧嘉麻郡綱分村、現九大九州文化史所蔵）・麻生家文書（同立岩村麻生太郎氏蔵）・山口家文書（旧穂波郡南尾村山口角治氏蔵）・入江家文書（同内住村入江義明氏蔵）、豊前田川郡では六

角家文書（旧田川郡金田村、現在九大九州文化史蔵）、早川家文書（同弁城村早川ミユキ氏蔵）、石炭運送に關して世良家文書（同、世良テツ氏蔵）等があり、財閥の筑豊進出以前に村方地主・豪農層や周辺の農民が種々のかたちで、石炭にかかわったことを如実に示す史料である。これらを見ると村方史料の中から石炭関係のみ抽出して石炭業の歴史を組み立てることとは、石炭業の歴史を正しく考察することにはならないのではないが、今後は石炭業の歴史を村方史料と密接に關連させて見直す必要があることを教えられるようである。

またユニークな史料としては焚石の輸送にあたる轡（おび）を統制した遠賀川の川庄屋・一田家文書（旧遠賀郡吉田村一田七平氏蔵）があり、或は許斐鷹介が明治二〇年代に経営した炭坑史料が旧鞍手郡上境村の庄屋・副戸長の加藤（守）家文書の中に含まれていることも注意しなければならない。

なお戦前に筑豊炭田地域を丹念に歩いて石炭史料を書写した「宮崎百太郎氏採集石炭史料」は前に掲げた家々の史料を含むが、今日ではすでに原史料を見ることができないのもあつて貴重である。現在九州大学経済学部に寄贈されている。さらに福

岡藩の焚石に關する統制は薪や木炭も含む燃料規制として「御仕立炭山定」に詳しい。これは黒田家文書（現在福岡県文化会館所蔵）の中のもので、このほかにも黒田家文書の中には焚石に關して種々の記事を散見するのである。「御仕立炭山定」は最近福岡大学研究所叢書中の一冊として校註刊行された。

筑豊が波瀾万丈の発展を遂げた明治期の史料のうち特筆すべきものを挙げると、北九州市立図書館に所蔵される中原嘉左右日記がある。慶応四年から明治二七年に至るもので、石炭問屋の史料として、また問屋資本の炭坑経営への進出の史料として注目すべきものである。米津三郎氏により校註、刊行され、最近第十二巻が出て完成した。また直方市石炭記念館（筑豊石炭鉱業組合直方会議所・同組合直方救護練習所跡に昭和四六年日本石炭協会が設立、直方市へ寄贈）は主として炭礦の施設、機械、用具等を展示しているが、文書史料として明治・大正期の筑豊石炭鉱業組合の記録を豊富に保存しており、同組合の「筑豊石炭鉱業組合月報」（明治三七年創刊）と共に組合の活動、各炭礦の景況を詳細に知ることができ

る。さらに若松石炭協会（昭和五二年三月解散）の諸資料の中には協会の前身若松石炭商同業組合により作成された若松港関係の石炭統計書が明治三三年以来連続しており、現在北九州市立図書館若松分館に移管されている。このほか明治期の石炭の研究には新聞も批判的に利用すれば、きわめて貴重である。他の如何なる資料にも見出せぬものが記載されているからである。福岡日々新聞（明治一三年創刊）は西日本新聞社（明治一〇年代は欠号が多い）、九州大学（明治一九一五年）、福岡県文化会館（明治三四年以降）にあり、福岡新報（明治二〇年創刊、明治三一年九州日報と改題も西日本新聞、門司新報（明治二五年創刊）は北九州市立図書館に保存されている。

三池炭田については筆者自身よく知らないが、小野家の「平野山石炭山関係文書」が柳川の伝習館に所蔵されていると聞く。官営時代の史料として三池鉱山局年報、雇英人ポッター・陳意録、さらに明治二二年払い下げ以降の史料は五十年史編纂関係資料や各鉱業所・港務所・製作所の沿革史等々と共に三井鉱山株式会社三池鉱業所資料等、いずれも現在は東京の三井文庫に寄託されている。周辺地域について地元の史料を探る

必要があるが、今迄なされていない。

三

右にあげた筑豊の詠家の文書のうち、数量的に最も多く、内容的にも最も豊富なのは麻生家文書である。年表の編集にあたっては、間も、たえず気になりながら訪れる機会を得なかったが、昭和四十九年七月一二日念願叶って飯塚市栢森の同家のお蔵に入れていただいた。多数の木箱・櫃・小箱等々が長年の埃をかぶって静かに眠っていたが、蓋をとり手にする一つ一つが今まで全く知らなかった石炭史料で、これほど大量の石炭史料が眠っていたことに、ただ驚きするばかりであった。しかも他方では延宝八年以来、ことに文化・文政以降の村方史料が豊富で幕末、明治前期における村方史料や地主経営史料と石炭史料との密接な関連は、いかにも土地に根ざし、筑豊御三家の一といわれる麻生家らしい文書のあり方であった。財閥史料による石炭産業史の研究とは局面を異にして、もっとドロドロとした地域社会の錯雑・重畳・屈折した諸関係の中で石炭産業史を考え得る好史料であらう。すでに麻生家の一族は幕末に焚石丁場(炭坑)の経営にあたっており、明治四年目尾炭坑の経営に乗り出し

て以来各炭坑ごとの諸史料、川柳や筑豊興業鉄道会社、若松築港会社の史料、麻生商店時代の会計帳簿、さらに三井物産との往復文書等、或は麻生太吉が筑豊石炭礦業組合総長、石炭礦業聯合会会長、貴族院議員等になっているだけにその方面の文書・刊行物もあり、夥しい数の書簡類も多彩である。石炭産業史がいかに多面的であるか。筑豊の天地で詳細、具体的に跡づけると共に、広く全国的乃至国際的視野で石炭を見なければならぬことを教えられる。目下文書の整理、目録作成に努めており、その内容は「九州石炭礦業史資料目録」第一―四集を参照していただきたい。

四

残りの紙数が少なくなったので、肥前について簡単にうかがっておこう。佐賀藩・唐津藩の藩政史料のなかに石炭史料がどの程度見出し得るのかは知らない。しかし幕末・明治二〇年の間、石炭生産の中心は肥前であったので、それだけに残存する此の時期の史料はきわめて良質のものである。

佐賀県立図書館に所蔵される鍋島本藩資料の中の「高島石炭坑記」は長崎県立長崎図書館に所蔵される高

島石炭坑記」とともに(相互に欠を補って完)高島炭礦研究の基本史料となっている。また佐賀県立図書館におさめられている佐賀県明治行政資料には「鉱山一件書留」・「鉱山志料調」はじめ明治前期の石炭史料が多数あり、また官省進達・長崎案文等標題には石炭が出ていない史料にも高島炭礦はじめ各地の炭礦、政府との往復文書がおさめられている。

多久市立図書館所蔵の多久家文書の中にも石炭関係史料は多い。「御屋形日記」には宝暦元年より石炭が見え、「御小物成役所控」とともに藩政

期多久領の石炭生産、流通をうかがうに良い史料であり、明治前期にも旧多久家臣で炭礦を経営する者も多く、これらと深いつながりをもち、石炭運送のための「運炭舎」設立の

発起人には多久家も名を連ねるなど、明治前期の石炭史料は注目すべきものである。多久では酒造業等で蓄積をなした副島家が幕末・明治初年に炭礦経営に乗り出し、諸種の経営史料を残している。そのほか横尾家文書、安倍家文書も注目すべきもので、

横尾家の襖の下から出た坑夫の入籍、逃亡にかかわる史料も興味深いものである(多久の史料については、細川章「地方図書館における文書の収集と

整理―多久市立図書館の場合―」「西南地域史研究」第二輯を参照されたい)。

また武雄の今泉家文書(今泉信彦氏蔵)の中には天保十一・十二年武雄領内で石炭を採掘した際の比較的まとまった史料であり、北方大崎の稗田家文書(稗田朴三氏蔵)も幕末・明治前期の石炭史料を相当数含んでいる。近くの大崎八幡宮には慶応元年に奉納された炭坑絵馬があり、佐賀県立博物館所蔵の「肥前国産物図考」の石炭図とともに往時の石炭採掘状況を偲ぶことができる。

唐津炭田は唐津藩のほか幕末に薩摩藩・久留米藩も進出、経営したところであり、明治期の海軍予備炭田、海軍石炭用所等重要問題があるが、現地で見ると史料は少なく断片的である。最もまとまったものは旧東松浦郡梶山村峰家文書(現相知町公民館蔵)であり、峰燂日記には石炭に関する記事が散見されて興味深い。

このほか長崎図書館の豊富な石炭史料について述べるつもりであったが、著名なので割愛してもよいであろう。最後に九州の石炭史料と東京をはじめ全国各地の豊富な石炭史料とを如何に結合させ、関連させて研究を進めるか、今後の大きな課題の一つであることを強調しておきたい。

「真田家文書」の整理を終って

原 島 陽 一

当館が所蔵する三二〇件の家別文書のなかで、総計三万点以上という一件あたりでは抜群の数量をもつ信州松代の真田家文書が、今年三月発行の『史料館所蔵史料目録』の第二十八集に収録され、「その一」として公刊された。この目録は、いろいろの意味で、これまでに編成された二七冊の目録とは違った点が多く、恐らくは今後発行される目録にも同じ状況は現われたいと思われる。いま、刊行を終えたところで、それらのことを中心に、文書の整理・編集を担当した一人として、思いつくままに二、三の問題について述べることにする。弁解や反省に墮するところが多く、お役に立つことは少いと思うが、お許しいただきたい。

この文書の目録化に当っては、まず何よりも、全体量が多いという物理的制約が、あらゆる面で優先する条件となったのは仕方のないことであった。それは、印刷目録の候補に挙げられる以前からつきまとい

ていた。当館の印刷史料目録は、一人が一文書を担当するのが、最近十数年の定着した形式である。これを一般論としてみれば異論もあらうが他の事業との関連など当館の実情から、一応この形式に落ちついたのである。そして、目録一冊に収録される史料の量は約五千点前後であることは、既刊の目録を一瞥して下されば明瞭であろう。これを一定の期限で回転させるならば、全体で三万点余という文書は、永久に目録化のスケジュールにのって来ないわけである。

一方、この真田家文書に限らず当館の所蔵史料は印刷目録ができていないものも、そのほとんどを閲覧利用に提供できるようにしており、これまでも真田家文書は何人かに利用されて来た。しかし、本整理の済んでいない文書の利用には不便が多く、少しでも早く目録化する必要を感じていたが、右のような事情もあって、その機会を見出せないままに放置されていた。

それが、目録化を計画できるようになったのは、去る昭和四十七年五月の史料館改組にともなう建物の新築と史料の移動が一つの契機となった。

史料だけでも約五十万点に達し、このほかの図書類や民具などを加えた全資料を移動することが決ったときは、正直いつて成算はなかった。移動は正確で、しかも迅速でなければならぬ。類似機関の移転例では一年とか二年の閉鎖期間があった。

利用者のためにも、閉鎖期間はできるだけ短縮したかった。(大部分は半年の閉鎖で再開したが、一部は本号別掲のように今夏に及んだ)そして、この移転期を利用して、目録の刊行予定を一部変更することによって、真田家文書の目録化が可能になったのである。それには館員一同の協力を得たのは当然であるが、目録化を進めるに当って、書庫移動などの外的条件が重要な因子として作用したのは残念であった。

が合意した上で提案したので問題はなかったが、どこでも応用できるかは疑問である。

第二は、三人の共同作業としても全体量と期限との調整上、真田家文書全部を対象とするには無理があったため、冊子型の史料を分離させ、書付型史料は別途に目録化を計ることとしたことである。これは、史料館で前例を見ない方式であり、整理にとって好ましくないことは、改めて指摘するまでもない。だが、書付型史料を含めた全史料を対象とするためには、完成予定をさらに延長しなければならず、それは誰の目にも不可能であった。大量史料の目録化を進めるために、甚だ不本意な方式ながら、敢えてこれに妥協せざるを得なかったものと、ご理解いただきたいと思う。

三

いよいよ整理に着手する前には、整理の方針などを三人で検討し合った。重点は、全体の作業計画と共同作業に伴う利点と欠点の検討である。実際には、書庫に収納されてから二十年を経ている文書なので、まず現状の確認から始めて、各自の分担史料の配分などの実務的な作業と、整理に必要なデータ作りの計画

などが決められていった。もちろん、一度で解決できるわけでもなく、その後も必要に応じて打合せを繰返しながらか、追加したり変更したりしたことはいうまでもない。それらの検討事項の中には、一人で担当した場合には、三人の共同作業なるが故の特殊な注意点の二三を挙げておこう。

始めに、極めて些末な事務的な処理事項として、三人が一せいに作業を開始するため、史料の整理番号をどのように付与するかが、まず問題となった。これの解決法は、①番号のほかに各自が特有の符号をつける②適当な番号で区切りながら三人の番号を連続させる、③仮番号を使用して最終的に通し番号に付けかえる——の三方法が一般に実施されている。このうち、③は利用にも便利である上、みた目もとのつていがあるがそれだけに手数が煩雑である。少なくとも番号付与の作業が二重になりその分の日数が延びるし、しかも最後まで書庫に配架することができない。②は、これとは全く逆で、能率的であるが、銘々の番号の配分量の予測がむづかしい。少なすぎると一連史料の番号がとび離れてしまうし多すぎると欠番を生じる。それに、

②と③とは一連番号であるから、最終的に五桁の整理番号になることが避けられない。その点、①ならば、常識的に三分割すれば各自の整理番号は四桁で納まる。ただ、番号のほかに符号の付くのが煩わしく、これが目録上での表記を複雑にさせ、出納を面倒にさせることが欠点である。結局、それぞれの長短を考慮して、館員の了承を得た上で、①の方式を採用し、符号には五十音の平仮名体を使用することにした。現在、目録が発行されて未だ半年に満たないが出納担当者から、符号が余計になるので不便だと、やや不評のようである。

このほかの実務的な事項としては作業は三人が分担するが、結果は一人で整理したような体裁に整えることを目標にした。というのは、本来一つにまとまっているべき史料が、たまたま別々に保存されていたために、二人が別個に扱って、三ヶ所に分離することになるのを防止しようということである。整理者にとっては当然の責務であるが、実際には困難が多い。今回は、書付類と違って冊子型の史料なので比較的容易だと考えられたが、それでも、表紙の欠損した同種の帳簿を、二人が持ち寄り

て一つにまとめるのは、想像以上にむづかしい。目録では、同一の表題をもつ史料が二ヶ所に分散してしまう例も出来て、面目ないことであつた。

だが、大量の史料であれば、一人で整理しても、同種の史料をこのように分散させる危険はある。況して共同作業では、よほど相互の連繋を心がけないと失態を招くことが予測されたので十分注意したつもりであつたが、やはり限界があつた。これを避けるために、必要と考えられる史料について、書式のメモをとるように努めた。これは必要な工程だとは思っているが、現実には所期の目的を達しないままに終つた。それはメモが多くなると、その中から探し出すのが一仕事で、実際には口頭の説明で照合することが多く、作成したメモは、その時の確認材料に使用される程度にしか活用できなかった。

これに対して、家臣団の人名カードは、予想した以上に役立った。史料を整理する時に、人名がもっている比重大ききは、経験者なら誰でも気付いているはずだが、ことに真田家文書のような大名文書では、これが重要なことはいうまでもない。それで、整理に着手する前に、まず

家臣の人名カードを作成することにした。受入時の仮整理によつて、これに利用できそうな史料の推定はできたが、十萬石の大名家ならば恐らく整備されていたと考えられる家臣団の系譜集ないしは履歴簿に類する史料は見出せなかった。やむなく、類似史料を利用することにしたが、それは、家臣個人の履歴——多くは御目見または家督以後の給祿・扶持の増減、役職の就退任などの事項を記したものを、いろは別に編冊したものである。これが二種類あつて、内容から推定すると、一つは文政頃他は明治初年に作成されたと考えられる。だが、両方とも欠本があつて完全に揃わない上に、年代も天保期のところで連続しないものがあったり、史料の中に出てくる人名を検索しても収載されていないことがあり、その意味では不完全なものであつた。しかし、ともかくもこの両方を一人ごとのカードに写しとつて、五十音順に配列した。これに他の史料で判明した事項や後述の新資料を追補していった。このように原本に欠陥はあつたものの、この人名カードはその後の整理に十二分に活用できた。いつか、何らかの形でこのカードの公開をはかりたいと考えている。

四

現地に残存していた大量の史料を発見する契機となったのも、家臣団の系譜史料の探求が一因であった。

現地の関連史料については、目録化作業のたびに、従来もしばしば指摘されて来た問題で、文書を手出した時点で関連史料の調査が必要なこととは改めていうまでもない。ただし所蔵史料のすべてについて、今すぐ関連史料を調査することも現状ではいろいろな支障があつて実現できそうではない。当分は、押しつまつてからの探訪を繰返すばかりではない。

何度もいうようだが、当館に譲渡された真田家文書は、極めて多量で現地からの輸送には鉄道貨車一輛を要したと伝えられている。その量の多さに眩惑されて、大名家史料が本来もっているはずの膨大な史料群の原形を忘れた面がないとはいえない。それに、地元の研究者からも、大半は当館に移動したように聞いているし、その方々が近くの松代でなく、遠路わざわざ当館まで足を運ばれることが、それを証明していると思われる。従つて、現地調査の必要性を常々痛感していたわれわれも、それほど多量に重要な史料が残っていることは夢想だにせず、やや見くびつ

て調査に向いた。それだけに、現地の真田宝物館で、一見して約一万点以上の史料を目の前にした時の驚きと喜びは、何と表現してよいかわからない。同時に、当方の探訪の趣旨を理解して下さり、初対面のわれわれを書庫にご案内下さった宝物館の方々のご好意をいつまでも忘れることができない。

だが、喜びと苦しみは表裏一体で史料は少ないものとたかをくくつて、何の準備もしていなかったため、多量の残存史料をどう処理するかを迫られる形となった。幸い、宝物館側のご理解と、長野県史料行会のご協力によつて、その史料の目録作りを発見から五ヶ月後の昭和五十年八月には着手することができた。それ以後、昨年七月まで数次にわたる調査で約八千点の目録を作成するとともに、そのうちの百点余をマイクロ撮影することができた。改めて関係各位のご協力に心から感謝の意を表する次第である。

宝物館には、われわれの予想を遙かに上廻る大量の史料が残存していたが、宝物館を訪問する時に微かに期待していた家臣団系譜に関する史料は発見できなかった。ただ、それから間もなく、全く別のところで家

臣団の系譜集の所在を確認し、それが真田家の所蔵に戻つたため、これをマイクロ写真に収録することができた。この陰には、当事者のご理解はいふまでもなく、調査にご協力下さった数名の方々が介在しているもので、毎度ながら有難いことと感謝のほかはない。ただ残念なのは、ここで見つけた系譜類も家臣全部に及んでいず、依然として、経歴不詳の家臣があり、最後まで整理に百パーセント活用できなかった。これは今後も留意して探求したいと思つている。

五

参考データとしては、各種の日記の索引である「日記録出」を使つて年表を作成したり、収支勘定目録によつて各年の収納額を抽出するなど広汎な利用を意図しながら作成を重ねた。ただ、当初の計画ほどにデータを駆使することができなかったのは残念であり、作成に協力してくれた若い友人たちにも申し訳なかったと思つている。しかし、データとしての有効性は高いので、今後もある機会が多いと思う。

いろいろと心残りの多い作業であつたが、何としても衝撃的であつたのは、構成員の一人である鎌田永吉氏が急逝するという、それこそ予想も

できない不幸に見舞われたことであつた。共同作業が、構成員相互の協力関係の上に成立するこゝろといふまでもないが、われわれの作業では個人の記憶や経験に頼る部分が多く一人を失ふことは単に一人分の労働力を削減する以上に多大の損失を与えることになる。例えば、一つ一つの史料について、表題や差出人や年代などをカードに記入するが、筆跡の特徴やちよつとしたヒント、一冊の内容の全体的印象など、カードやメモに記入しないが整理には重要な手がかりになる類の事柄は少なくない。こんなことは、本誌の読者の多くには自明のことかとも思うし、当然なのであるが、やはり現実経験して改めて思い知らされた。従つて今更らしく問題にするほどではないようにも思うが、共同作業には常にこの種の危険がひそんでいることを付言しておきたい。

最後に、個人的な回想をつけ加えることをお許しいただきたい。筆者が学校を卒業して史料館に就職した時、始めて整理に参加したのが真田家文書であつた。常勤と非常勤の十余人に教えられながら整理を続けたころを思えば、誠に感無量である。

史料とラベル

原島陽一

史料を整理する時に、後日の照合

などのために、番号や記号を付与する必要がある。当館をはじめ多くの機関では、われわれが俗にラベルと略称している小形の符票に、それらの番号や記号を記入して、それを史料に貼付している。それで「史料とラベル」と題したのであるが、本来は、それらの番号や記号を、史料といかに結びつけるか、というのが本稿の基本的命題でなければならぬ。

そこで、順序として、それらの番号や記号の表示方式には、どのような方法があるかを考えてみる。が、これは誰が考えても大差はなさそう

で、まず、史料に直接記入する(A)直接表示と、史料には一切手をつけずに史料を収納する箱や封筒などの外装に記入する(C)間接表示を両極として、両者の(B)中間的表示とを挙げることになるであろう。このうち、史料の保存には(C)の間接法が最も好ましく、逆に(A)の直接記入する方法はどうしても避けて欲しいものであることは、これまたいうまでもない

思う。

それほど明瞭ならば、(C)の方式によるべきだと結論すればよいはずであるが、それが簡単にそうとは決められないところに問題がある。それは何故か。いくつかの原因を挙げる事ができると思うが、現在のわが国における史料の保存利用機関のおかれている状況とかかわっている。(個人が私蔵している場合は、条件が異なるのでここでは除外して考える)

◇ ◇

史料の保存利用機関では、概して複数の家別文書を保管しており、それらを簡単に、しかも確実に識別できるように整理することが、基本的な条件とされる。それは、所蔵史料を管理するためであり、また閲覧利用者に収納する時の利便のためでもある。それならば、簡単にしかも確実に識別するためには、どのような方法をとるべきだろうか。史料を一点ごとに封筒などに入れて、封筒の表面に記号や番号を表示しておく

前記(C)の方法は、書庫に配架しておくだけならば、全く問題はない。だが、外装から史料を取り出したあとが面倒である。例えば、長尺の書付で末尾の年月日だけが相異なる二通の史料を、同時に利用提供した場合に、返却された二通の史料を収納者はどうやって見分ければよいのだろうか。まして、当館のように近世史料を主対象にしていると、利用者の請求件数が一人平均三五点(今年上半期)に達し、これを一つ一つ元の

でもよい。ラベルを付けておけば、万一返戻を間違えても、後日これを修正することができる。

外装へ確認して返戻するのは大変な手間である。もちろん、どんなに手間がかかっても、史料の原型に勝手な加工をせずに保存すべきだと考えないではない。しかし、保存機関の現状は、それを認め得る状態にはない。また、何かの事故で外装から史料が離れてしまった時、地名や人名などの手がかりが少ない史料であれば、所蔵史料といえども、その所属を再確認するのは予想外に困難である。こんな場合でも、史料にラベルが貼ってあれば、即座に解決する。

本誌の前々号(27号)で、筆者は史料の原形尊重の立場から史料には蔵書印を捺さずに保存することを提案したが、その時にも、ラベルの貼付を已むを得ない措置としたのは、このためである。

ラベルによる記号・番号の表示は前掲の分類では当然(B)の中間方式に相当する。中間方式としては、帯封をついたり、小札を糸で留めたりする方法も考えられる。さらに、原料に別の表紙を加え、または裏打ちの端を切り残して、その表紙や切り残し部分へラベルを貼っている例もある。原史料に表紙や裏打ちの加工を施している点では、(B)に近い手段と認めてよいだろう。

なお、所蔵点数が少ない等の理由で、(C)の方式でも史料を取違えるおそれのない場合には、間接方式でよいのであって、ラベルが唯一の解決策でないのは、いうまでもない。

◇ ◇

封紙や包紙あるいは別紙・添状のある史料はラベルを付けてさへも、原型への返戻は容易でない。出納は一回一点と制限でもない限り、混乱を防止する確実な方法はないといっ

史料の記号番号をラベルに記入して貼付することに関連した、いくつかの注意点を以下に述べておこう。なお、ラベルというのは略称で、図書館

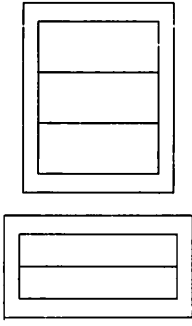
のブック・ラベルに対して、史料ラベルとでも呼ぶべきだろうが、今回は通称に従って単にラベルと呼ぶことにする。また、本稿の対象はあくまでも史料に直接貼付するものとし、数十点の史料を収納する大形箱などに用いる表示札は除外して考えることにしたい。

まず第一はラベルの形状である。

当然ながら、ラベルに記入する事項によって形状は左右されるが、一般には左図のような四辺形が多い。形状のうちで最も重要なのは、その大きさであるが、これについて詳述したものがないので、当館の事例で説明しよう。史料館で使用されたラベルの大きさを、作成した年代順に列記すれば次の如くである。(いずれもセンチを単位にタテとヨコの寸法を示しカッコ内は内枠寸法である。)

- ① 5.4×6.5 (4.6×5.5) ② 2.5×2.0 (1.8×1.4)
- ③ 2.4×2.0 (1.8×1.6) ④ 2.9×2.3 (2.3×1.9)
- ⑤ 2.7×2.0 (2.0×1.6)

外側で表示したのは、所蔵を示す館名が枠外にあるからである。①～⑤



を一覧すれば、①の大形に対し②以下が小形化しているのが明瞭であろう。これは、いうまでもなく、史料への影響をなるべく小さくする意味のほかに、史料の表紙にはラベルを貼る余白が少なくという現実的結果でもある。なお、④で一度やや大きくなったのは、整理番号が四桁になった時に、③ではナンバーリングの打ち込みに大変神経を使うので改変したのであったが、四桁がいりぐいならば、ナンバーリングの方を細字体に変えればよいことに気付いて、再度小形化を試みたのが現行の⑤であった。

序でながら、ラベルの小形化は、図書館などにもみられる傾向のように思う。記憶による印象であるが、歴史の古い図書館の初期のラベルは現行のものより大きいことが多い。

ラベルの紙質として何が最適なのか、とくに調査したことはないが、50 kg前後の上質紙を使っている。少なくとも、厚い強わった紙は不適当で、その意味でも、一部に市販されている糊つきの図書ラベルの転用は好ましくない。厚い表紙をもつ活版本と、薄くて柔らかな和紙とではそれに貼るラベルの紙質を違えるの

は当然といえよう。だが、和紙には和紙を、ということと、前記③の一部を和紙で作ってみたが、結果はよくなかった。理由は△紙質が柔らか過ぎて貼る時に注意しないとラベルがよじれる△和紙にはミシン目が効かず一枚ずつの切り離しに鉄を使うので手間がかかる△紙質が薄いので時に印字が糊を通して史料にしみ出る危険がある、などであった。試作の和紙の質がよくなかった点も認めるが、多量の史料には不向きなことも確かである。

次に、ラベルの紙色であるが、白色が無難であろう。万一の場合を考えて、紙色がにじみ出ないことが最低条件である。同じ理由から、枠や所蔵館名などの印刷インキにも注意が必要である。当館では、所蔵史料用の黒色に対し、受託史料用は赤色印刷にして、一ト目で区別できるようにしている。

◇ ◇

史料にラベルを貼るのは、前述のように、已むを得ぬ措置でもあるから、そのラベルは必要に応じて容易に剝がして、本来の姿に復原できなければいけない。丁度、正式の裏打ちが、いつでも裏打紙をはがすことのできるのと同じ趣旨である。それ

には、ラベルを貼る糊にも注意が必要である。接着力が強すぎると本紙を傷めずに剝がすことは不可能である。市貼のアスチック系の図書ラベルは、ここでも不適格となる。ラベルの面積は小さくとも、貼付したために虫損や糊のシミを作ることのないように心がけねばならない。

最後に、ラベルを貼る位置であるが、文字や絵図にかからないように貼るのは常識であろう。ラベルを貼る位置が統一できれば、それに越したことはないが、規格性の乏しい史料に統一規準を適用しようとしても無理が生じる。江戸時代の版本の脇題箋や見返し、または奥付の文字の上にラベルが貼ってあるのを図書館で経緯しているが、所定の位置ならば文字の有無を用捨しない機能優先は、史料の場合には矢張り避けるべきであろう。当館では、罫本型の冊子は表紙の右上を第一順位として、右下、左上と順を定めているが、これでは厳密には規準とならないが已むを得ない。書付類は原則として裏面に貼るが、端裏書のある場合など貼る位置は多少移動する。但し、ラベルを貼る目的に従って、見やすい場所を選ぶことも、また留意されなければならない。(つづく)



当館における

近世史料目録の調査・収集報告

当館の業務の一環として、近世史料目録の全国的、体系的収集整備を本格的に着手したのは昭和四五年であった（本紙二四号収録の山田哲好「近世史料目録の調査収集の課題」参照）。

それはまず当館所蔵以外の近世史料目録に関する情報を入手し、その目録をできる限り収集することを目的として始められ、各都道府県立の中央図書館・文書館等のご協力を得て、かなりの目録を収集することができた。そこでご協力をいただいた

ご好意に対し、ここにその書目等を掲載して感謝の意を表したい。ただし、その収集は目録の残部がある場合はご好意に甘えてご寄贈を頂いたが、大半はゼロックスなどの複写によるものである。作業は最初目録の丁数等のご教示を得ることから始まり、館によっては複写設備のない場合があり、一部見送らざるを得なかった。また目録が多量のため、当館内で複写できるよう、特別貸出の措置を講じていただいた機関もあり、各館では地域内での目録の在庫有

無・寄贈手続・経費面でのご尽力をいただき、改めてこの業務が関係諸機関のご助力の賜物で成り立つことを痛感している。なお在庫の史料目録をご寄贈下さった分については、その都度本紙の受贈図書欄に掲載済みであり、今回は一部省略したことをお断りしてご寛容をお願いしたい。

今後とも乏しい予算の範囲内という制約はあるが、近世史料目録の情報及びその収集を継続するが、まず収蔵した目録の閲覧公開が可能となるよう、その体制づくりが先決である。さらには一件ごとのカード化をはかり（現蔵地と旧蔵地が異なる場合は、それぞれの地域でカード化、現在約一万二、〇〇〇件のカード化完了）、近世史料に関する全国に及ぶ体系的な把握を目指している。今後関係諸機関・関係各位のご協力、ご助力を切に願う次第である。

（北海道）

千島関係文献概略（目録）

北海道庁文庫図書目録 報告之部

本庁文庫図書目録 歴史旧記 北海道庁

河野前主任引継書 河野常吉

図書原簿 雑之部 北海道庁

樺太関係図書目録

蝦夷文献集目録 太田岩太郎

清水谷伯爵家所蔵史料目録

北海道関係旧記一覽

北海道農業関係文献・資料目録 石関良

司編 農林省農業総合研究所

留寿都村役場所蔵文書年次別目録 黒崎

八洲次良編

阿部家文書目録 北海道立図書館編

郷土資料目録 市立苫小牧図書館

（青森県）

郷土文献目録第一・二編 青森県中央図書館編

下北半島主要文献目録 鳴海健次郎編

（宮城県）

小西家図書古文書目録

資料筆写目録（その一七） 宮城県史

編纂委員会編

大正五年現在仙台郷土文献目録備考 同

右編

財団法人斉藤報恩会博物館図書部編東北

地方関係図書分類並常盤文庫、仙台関係

図書分類目録（古文獻目録第七） 同右編

毛利総七郎氏所蔵古鏡文庫図書目録・雨

香鈴木省三遺書目録（古文獻目録別冊第

十） 同右編

青柳文蔵翁伝・青柳館文庫所在目録 宮

城県図書館編

郷土関係図書目録 同右編

宮城県図書館蔵書目録1郷土資料編 同

右編

宮城県市町村史誌目録 同右編

（秋田県）

戸村文庫目録（ともしび別集五号） 秋

田県立秋田図書館編

史跡内館文庫目録・同沿革誌 武内正俊

編

秋田県行政資料目録 昭和三十六年六月三

〇日現在 秋田県行政資料室

秋田県行政資料目録 昭和三十九年二月現

在 同右

（山形県）

鶴岡市図書館蔵書目録1 同館編

（福島県）

会津領小川庄五十鳴村渡辺家近世史料目

録 渡辺綱男編

若松市立会津図書館図書目録 郷土志料

之部 同館編

（福島・宮崎県）

旧内藤藩領地方文書目録 明治大学図書

館編

（茨城県）

勝田家史料目録 茨城大学附属図書館編

吉田葉王院文書 水戸市史編纂委員会

(栃木県)

旧今市宿文挾氏所蔵文書目録(郷土資料調査報告第一集) 今市郷土文化研究所編

(群馬県)

中山道碓氷峠曾根家文書目録 本多夏彦編

中山道碓氷宿永井家所蔵文書目録 本多夏彦編

中山道坂本宿本陣文書目録 群馬大学文学部史学研究室編

中山道坂本宿本陣文書目録補遺 本多夏彦編

彦編

(埼玉県)

内田家所蔵古文書目録第一集(那賀郡古郡村) 根岸篤太郎編

越谷市近世古文書目録(昭和四五年度調査報告書) 越谷市史編さん室

逸見家文書目録(秩父郡野巻村) 秩父図書館蔵

二宮家文書目録(秩父郡荒川村) 二宮完二郎編

大里郡川本村所在文書目録

鹿島神社所蔵文書目録(豊里村文化財目録1古文書の三) 豊里村教育委員会

橋本正次氏所蔵文書目録(同右四) 同右

岡戸家文書目録(埼玉郡下手子林村)

武蔵一ノ宮水川神社調査報告書 大宮市史編さん室

滑川村の文化財(昭和四四年度調査)

滑川村文化財保護委員会

上尾市上尾宿友光家文書目録 埼玉県立

図書館

大島家文書目録資料抄録(大宮市文化財調査報告第一集) 大宮市教育委員会

西川家文書調査目録(北足立郡足立町志木) 埼玉大学教養部日本文化研究室

笠原村近世史料目録(鴻巣市)

宝来石川一家文書目録(大宮市)

西遊馬・都筑義正家所蔵文書目録 大宮市史編さん室

玉蔵院所蔵文書目録(浦和宿)

民有文書その一 柳川家文書 福岡町教育委員会

比企郡小川町所在文書目録 関根智司編

比企郡鳩山村所在文書目録 関根智司編

比企郡滑川村所在文書目録 埼玉県地域総合調査会

東松山市所在文書目録 同右

比企郡嵐山町所在文書目録 同右

井上家文書(秩父郡荒川村) 荒川村教育委員会

武州秩父郡本野上村文書目録(野上町役場蔵) 栃原嗣雄編

秩父郡藤谷沢村田義六氏所蔵文書 同右

飯野家蔵広木区有古文書目録(児玉郡美里村大字広木)

稻生家史料目録 大館右喜編

武州入間郡厚川村鹿山家史料目録 大館右喜編

武州秩父郡南川村吉田家史料・高麗郡小瀬戸村須田家史料目録 大館右喜編

武州高麗郡高麗本郷村梅原村史料目録

武蔵国入間郡小杉村山田家所蔵史料目録

埼玉県地方研究会

宿谷家文書(飯能市) 加藤一編

武蔵国比企郡鎌形村鎌形八幡宮并本山修験大行院文書目録 長島喜平編

児玉郡元田村今井家文書目録 根岸篤太郎編

比企郡玉川村所在文書目録 関根智司編

児玉郡児玉村松村家所蔵文書目録

北足立郡伊奈町田中家文書目録 加藤安雄編

上尾市堤崎安藤家所蔵文書目録

(千葉県)

旭市史料所在目録第一集 旭市史編さん委員会編

(神奈川県)

横浜市立図書館蔵書目録 第五・六編(郷土資料その一・二) 同館編

小田原町図書館郷土資料目録 同館編

(新潟県)

郷土誌料総合目録(昭和三年末現在)

新潟県立図書館編

新発田市立図書館郷土資料蔵書目録 同館編

川村家文書目録(新潟町)

会津領小川庄五十島村肝煎渡辺家文書目録 渡辺綱男編

会津領小川庄五十島村渡辺家近世史料目録 渡辺綱男編

羽茂村誌追補古文書目録 海老名保作編

三国街道三俣宿文書目録 桑原孝・中野三義編

浅見本陣綿貫内蔵之輔所蔵文書目録 桑原孝・中野三義編

高藤家古文書目録(蒲原郡中島村) 分水町教育委員会

水原博物館収蔵資料目録一号 同館編

金子家文書目録(在志郡村松町) 長岡市立立尊文庫

西川町所在資料目録第一集西沢上土屋家文書 西川町教育委員会

(富山県)

井波町史料目録 井波町史編纂委員会編

中島図書館古春亭文庫書目 上 私立中島図書館(津沢町)

高田家文書目録 福光町史編纂委員会

中沢家文書目録 福光町史編纂委員会

(石川県)

大礼記念金沢市立図書館蔵書目録(昭和六年一二月現在) 同館

木谷家文書目録(石川郡栗崎) 上田扇園

喜多家文書目録(押水町) 上田津太郎

(福井県)

佐久間氏所蔵文書目録 武生市立図書館

(山梨県)

増穂町史料目録(郷土史編纂資料第七集) 若林淳之編

(長野県)

古文書目録第一一三十八集 東筑摩郡郷

土資料編纂会編

長野県北佐久古文書類調査書第一・二輯

信濃教育会北佐久部会編

改訂新編松代町史資料第一・二集 松代

町史資料調査委員会

更級郡古文書目録第一集 更級郡教育会

郷土研究委員会

丸子町旧西内村古文書目録第一・二編

西内公民館

上水内郡古文書目録第一輯 信濃教育会

上水内教育部会

上高井郡誌資料 上高井郡誌編纂会

長野県上高井郡都住村古文書展覧会出品

目録 信濃教育会上高井教育会

仁礼村古文書目録 同右

水内郡問御所村久保田家文書目録 県立

長野図書館

第七回上高井郡古文書古記録展覧会井上

村出品目録 信濃教育会上高井部会

郷土古文書目録 下高井教育会

栗林区有文書・一本木区有文書 中野市

誌編纂準備委員会

竹原区有文書・武田利八所蔵文書目録

同右

県立長野図書館郷土資料目録(昭和四一

年三月末現在) 同館編

堀家所蔵古書其他古書目録・市岡家所蔵

古書目録 飯田市立飯田図書館

上高井郡古文書目録第一輯 信濃教育会

片桐村誌資料古文書目録 片桐村誌編纂

委員会編

下久堅村資料目録第二集 下久堅村誌

編纂委員会

戸隠山史料目録 正・続 信濃毎日新聞

社戸隠総合学術調査会編

保科村古文書目録 信濃教育委员会上高

井部会

(愛知県)

一宮市史資料目録 一宮市立図書館

宝飯地方史料目録(宝飯地方史料Ⅰ)

愛知県宝飯地方事務所編

新城市近世文書目録(新城市誌史料Ⅰ)

新城市教育委员会

足助町近世史料目録(足助町誌資料Ⅰ)

足助町誌編纂委員会

(三重県)

須賀利浦方文書目録 尾鷲市立図書館編

(滋賀県)

近江国各郡町村絵図(地図)目録 滋賀

県総務課

(京都府)

松尾神社社蔵文書目録 中村直勝

革嶋家文書目録

革嶋家文書目録稿 棚橋信文・辻ミチ子

丹波国桑田郡山口郷拾二ヶ村並広原史料

目録Ⅰ 同誌社大学人科学研究所

(大阪府)

大阪郷土資料図書館目録第一・二輯 大阪

関西大学所蔵大阪関係資料目録(関西大

学書誌シリーズNo.6) 関西大学図書館

枚方市史編纂資料目録第一・三・別集

枚方市史編纂室

八尾市史編纂史料目録第一集

富田林市史資料目録第一・二集

布施史料仮目録Ⅰ・Ⅲ

泉ヶ丘町誌編纂資料目録

(兵庫県)

神戸市資料目録 神戸市立図書館

(奈良県)

保井家古文書目録 保井芳太郎編

大方家文書(生駒郡斑鳩町五百井)

倉弘他

西谷区有文書目録(一部)(吉野町)

松葉区長他

家蔵郷土研究史料図書館目録Ⅰ大和之部Ⅰ

保井芳太郎

古文書目録Ⅰ・Ⅱ 斑鳩町教育委员会

(和歌山県)

紀藩士著述目録 斎藤勇見彦

郷土誌料調査目録第一集Ⅰ地場産業の部

和歌山県立図書館

田所文書目録 田所双五郎編

青岸家文書目録(日高郡印南)

小谷緑

草

紀伊国関係図書・紀州人著述諸書現存郷

土圖書分類目録 山口藤次郎編

(島根県)

島根県仁多郡横田町役場蔵文書目録

横田町誌編纂委員会

(岡山県)

郷土史料未刊書目第一部 岡山県立中央

図書館

岡山県古文書目録 渡辺頼母編

玄石文庫図書目録 倉敷市教育委员会

洗心斎蔵古文状目録 水尾岩太郎

近世村方文書目録Ⅰ一九六五年版 井原

市教育委员会

津山松平藩文書(愛山文書) 仮目録

安藤靖雄・長光徳和・三好基之

郷土書籍目録 正宗文庫

池田家文庫貴重書目録 岡山大学附属図

書館

(広島県)

所蔵者別近世史料目録Ⅰ・Ⅱ(福山市史

編纂資料三・四集) 福山市史編纂会

(徳島県)

池田町郷土史料所在目録第一輯 池田町

教育委员会

徳島県史料所在目録Ⅰ・Ⅱ 徳島県立図

書館

(福岡県)

伝習館文庫目録 福岡県立伝習館高等学

校

豊前国田川郡添田手永大庄屋中村家文書

目録(田川市史資料Ⅰ) 松下志朗編

永洋子編
(長崎県)

平戸松浦家資料 京都大学文学部国史研究
研究室編

肥前島原松平文庫目録 島原公民館図書
部

気楽院文庫図書目録 小国東岳

(熊本県)

荒尾市の古文書(目録) 荒尾市教育委
員会

下田家文書目録

阿蘇家近世史料目録

近世史料目録

弥富家近世史料目録

西嶽殿寺近世史料目録

(大分県)

大分県立図書館所蔵大分県行政資料目録

大分県立大分図書館

広瀬家文書目録二 九州大学九州文化

史研究施設

(鹿児島県)

鹿児島県立図書館郷土志料 大正五・六

年 同館

郷土志料分類目録 大正一二・一三・一

四・昭和四年 鹿児島県立図書館

鹿児島城下諏訪馬場町山久敬家文書目録

録 五味克夫・松下志朗

薩州山田清安所蔵書籍目録

旧記題宛 伊地知季安編・市来四郎補遺

玉里島津家蔵書目録 竹内実次

受贈図書

昭和五十二年度 (三)

いまいち市史 史料編 原始Ⅰ・古代Ⅰ・

近世Ⅰ・Ⅲ 近・現代Ⅰ・Ⅱ

上尾市文化財調査報告 第一集(上尾市
教育委員会)

(群馬県) 大胡町誌

(新潟県) 村松町史 資料編 第二・四

巻

福知山市史

(福井県) 南条町誌

美濃加茂市史 史料編

(岐阜県) 穂積町史 史料編 巻一・三

江戸時代図誌 13 北陸道二(筑摩書房)

北海道開拓記念館調査報告 第14号

解題書目 第八集(青森県立図書館)

山形市史資料 第48・49号

(山形県) 高島町史 中巻

(福島県) 泉崎村史 文書目録編 第三

集

千葉県議会史 第三巻

青梅市史史料集 第22号

横浜市史 資料編十六・十七

浦賀奉行所関係史料 第四集(横須賀市
図書館)

鯖江市史 第五巻

山梨県議会史 第四巻

半田市誌 文化財篇

鳥取県史 第8巻
会員名簿 昭和51年度(霞会館)

早川文庫目録(小樽商科大学附属図書館)

村岡文庫目録(北海道森町教育委員会)

学術文献収報 第186・187合併号(北海道
教育大学附属図書館)

北海道刊行政資料目録 第10・11号

(北海道総務部行政資料課)

北海道開拓記念館一括資料目録 第10集

森井家資料目録

新収図書目録 1975年版(青森県立図書館)

弘前図書館蔵書目録 和装本の部その3

行政資料目録 追録第8号(青森県行政
資料室)

資料室)

八戸市立図書館漢籍分類目録

岩手県立図書館増加図書目録 昭和48・

50年度・昭和51年度

南部屋文庫目録(遠野市立図書館)

紙芝居目録(同右)

紙芝居目録 遠野市管内諸施設備付紙芝

居(同右)

明治時代の教科書(同右)

遠野に関する著書と著者(同右)

鹿角市文化財目録 第一・三集(鹿角市
教育委員会)

増加図書目録 昭和50年度(福島県立図
書館)

茨城県公共図書館逐次刊行物総合目録

昭和49年3月31日現在(茨城県立図書
館)

群馬県近世史料所在目録 2(群馬県
総務部県史編さん室)

新収品目録 昭和51年度(埼玉県立さき
たま資料館)

埼玉県教育資料目録 1・4(埼玉県立
教育センター資料室)

歴史資料館収蔵資料目録 第6集(福島
県文化センター)

福島大学附属図書館経済学部分館蔵書目
録 和漢書編(2)・洋書編(2)

千葉県史料調査報告書 1 千葉県古文
書目録安房国 1(千葉県企画部県民
課)

千葉県市原市古文書所在目録(市原市教
育委員会)

増加図書目録 昭和50年度(千葉県議会
事務局図書室)

千葉商科大学図書目録 和書の部第3巻・
洋書の部第3巻

寛政文庫洋書目録(東京都立大学附属図
書館報別冊)

森鷗外遺品目録(鷗外記念本郷図書館)

東京大学経済学部蔵書目録(洋書) 第Ⅷ巻

東京都公文書館蔵書目録 4

東京都公文書館所蔵庁内刊行資料目録 2

中央大学参考資料目録 欧文編 第1集

資料目録(東京都近代文学博物館)

明治大学刑事博物館目録 第47号

内閣文庫蔵書目録 第11・12・38号

東京都立中央図書館蔵書誌目録

町田市立町田図書館文学全集目録

町田市を知るための本 No.1 (町田市立町田図書館)

町田市を知るために…… No.2・3 (同右)

東京刑行物目録 昭和50年度(東京都総務局総務部文書課)

図書目録 交通の部 第4・5分冊(日本国有鉄道中央鉄道学図図書館)

早稲田大学社会科学研究所蔵書目録 東南アジア関係の部・中国朝鮮関係の部

栃木県史料所在目録 第6集(栃木県教育委員会)

成田図書館蔵書分類目録 仏教部

神奈川大学図書館蔵書目録 和書・洋書 (昭和51)

神奈川大学図書館雑誌目録 昭和46年度

版追録

文化資料館資料目録 図書部 第1集

(神奈川県立文化資料館)

県西地域広域市町村圏明治年代役場文書

目録(県西地域広域市町村圏協議会)

平塚市資料所在目録 神田・大野・旧市

内地区(その1)(平塚市史編さん室)

群馬県近世史料所在目録 3 (群馬県総務部県史編さん室)

神奈川県立図書館蔵書目録 和書の部 第8(上)

(神奈川県) 山北町所在史料目録第一

三集(山北町文化財保護委員会)

新潟県郷土資料総合目録 第2集(新潟県立新潟図書館)

福永古文書目録(上越市教育委員会)

文書目録 第一―四集(三条市史編修委員会)

富山県立図書館年間増加図書目録 昭和50年1月―12月受入分

富山県市町村刊行物 昭和50年度(富山県立図書館)

富山県関係新聞記事索引 昭和50年版(同右)

岸文庫目録(金沢市立図書館)

富田文庫目録(同右)

資料目録 '75・3・'76・3・'77・3 (石川県行政資料室)

能登輪島上梶家文書目録(石川県立図書館)

岐阜県立図書館蔵書目録 第1巻

市町村別岐阜県文化財目録(岐阜県教育委員会)

美濃加茂市史料目録(近世)

大垣市立図書館郷土資料目録 第3集

富士吉田市立図書館蔵書目録 No.1

愛知県立芸術大学附属図書館蔵書目録 第9輯

名古屋市立大学教養部蔵書目録 和書篇

名城大学蔵書目録 第一―六集

郷土資料目録 第十四集(彦根市立図書館)

犬上文庫図書目録(菟野町公民館)

植木文庫目録(同志社大学図書館)

立命館大学所蔵逐次刊行物総合目録 第2部

大阪商工会議所商工図書館所蔵社史目録

神戸学院大学雑誌総合目録 1976年版

川西市史編集資料目録集 13

帝塚山大学所蔵逐次刊行物目録

古文書目録 (1)・(2)(斑鳩町教育委員会)

高田文庫目録(福山市立福山城博物館)

山口県文書館地方調査員調査報告書 4

山口県内所在史料目録 第4集

瀬戸内海及びその周辺地域の漁撈用具収蔵目録(瀬戸内海歴史民俗資料館)

福岡県古文書等所在確認調査報告書(福岡県文化会館)

鹿島鍋島家(祐徳文庫)所蔵古文書目録

(九州大学文学部九州文化史研究施設)

山梨県立図書館所蔵古文書目録 Ⅱ

羽原文庫資料目録(東京水産大学附属図書館)

大谷大学図書館和漢書分類目録 第三

第一分冊・第二分冊・索引

(宮城県) 河北町誌 上巻

(宮城県) 南方町史 本編上巻・下巻

資料編

(福島県) 熱塩加納村史 第2巻

青梅市の埋蔵遺跡(青梅市教育委員会)

茅ヶ崎市史 1

(山梨県) 上野原町誌 上・中・下

沼川治水史(沼川土地改良区)

常滑市誌

刈谷町庄屋留帳 第一―三巻(刈谷市教育委員会)

(京都府) 久美浜町誌

摂津市史

(大阪府) 阪南町史 下巻

(福岡県) 赤池町史

佛教文化論集 2 (大本山川崎大師平間寺)

高槻市史 第四卷(一) 史料編Ⅱ

尼崎市史 第六巻

和歌山市史 第四巻 古代・中世史料

(徳島県) 松茂町誌 下巻

村山市史編集資料 第五号

本間家土地文書 第三巻(農業総合研究所)

(青森県) 浪岡町史資料編 第一―六集

群馬県警察史 第一巻

(兵庫県) 日高町史 上巻

直方市史 下巻

(石川県) 野口村史 第一巻

- (埼玉県)大滝村誌 資料編五
 狛江市史料集 第七
 鎌倉国宝館図録 第21集
 東大阪市史料 第六集(一)
 かわにし 川西市史 第六巻
 西部由宇辺津誌(丸瀬布郷土史研究会)
 西部志與古都誌(同右)
 上尾市史料 第一・八集
 狭山市史編さん調査報告書 1
 (静岡県) 舞阪町史 史料編九
 史料叢書 12・14 [下関文書館]
 (山形県) 大石田町史 史料編一・三
 佐野市史料 第十三集
 佐野市史料集
 入間市の古文書 目録編 2・4 [入間市教育委員会]
 戸田市史調査報告書 第三集
 昭島市史料編 板碑と近世墓・地方文書目録 I
 (東京都) 羽村町史料集 第一・二集
 [羽村町教育委員会]
 静岡県文化財調査報告書 第十五集(静岡県教育委員会)
 岐阜大学教育学部 郷土資料 (8)
 平松栄斎文書 2・3 [津市教育委員会]
 内閣文庫未刊資料細目 上
 北海道議会史 第五巻
 郷土資料叢書 第十輯 [新庄図書館]
 (山形県) 西川町史編集資料 第二号・第三号(一)・第五号
- 豊島区史 資料編 二
 (石川県) 志賀町史 資料編 第三巻
 山梨県教育百年史 第一巻(山梨県教育委員会)
 御殿場市史料叢書 2
 三州渥美郡馬見塚村 渡辺家文書 貢祖
 一(愛知大学総合郷土研究所)
 知立市史 上巻
 宝塚市史 第四巻
 同和教育史兵庫県関係史料 第二巻
 [兵庫県教育研究所]
 和歌山県史 近世史料一
 高知県史 民俗資料編
 神宮御杉山記録 第三巻(神宮司庁)
 芭蕉堂七世 内海良大(谷家蔵)
 江戸看板図譜(三樹書房)
 東海道枚方宿の本陣・脇本陣(中島三佳)
 表具の科学(東京国立文化財研究所)
 社会科 学習資料カード 6年・下(日本スクール出版)
 THE 江戸(読売新聞社)
 竜ヶ崎郷土史(竜ヶ崎市)
 近世中後期における災害と農村(立正大学古文書研究会)
 群馬県郷土研究者 資料所蔵家名鑑(群馬県図書館協会)
 馬場市史料 第一・三・五・八巻
 豊島区民俗資料調査報告書
 相澤日記(大正編)(相沢栄久)
 増補 相澤日記(同右)
- 横浜市文化財総合調査概報(一)
 新潟県中頸城郡吉川町顕法寺城(新潟県立柿崎高等学校歴史クラブ)
 彦根の町並(彦根市教育委員会)
 富田林寺内町(富田林市教育委員会)
 長州藩第二奇兵隊脱隊暴動史料集(光市立図書館)
 日本郵便銘集(岩崎美術社)
 津山基督図書館五十年誌・(同)別冊
 郷土資料室ガイド 第2・3集(石神井図書館)
 広島経済大学創立十周年記念論文集
 千葉県教育百年史編さん室始末記(千葉県教育センター)
 梅花学園百年のあゆみ
 日本の七宝・日本の民画(サントリ美術館)
 戦国武将展(埼玉県立博物館)
 宗元文化と金沢文庫展(神奈川県立金沢文庫)
 郷土の人物(石川県立郷土資料館)
 草戸千軒(福山市立福山城博物館)
 立命館学祖展観目録
 福岡市史 別巻
 江戸時代図誌 別巻二(筑摩書房)
 明治大正図誌 1(同右)
 「かわら版・新聞」江戸明治三百事件 I(平凡社)
 久留米の昔話を聞く Ⅷ(久留米市教育委員会)
- 東京都の文化財 (一)(東京都教育委員会)
 福山市古文書調査記録集(福山市教育委員会)
 薩摩藩の構造と展開(秀村達三)
 経済史文献解題 昭和52年版(日本経済史研究所)
 三条市史調査資料 第三集
 田無のむかし話 座談会 その1・2
 (田無市)
 土屋氏の歴史(前篇)(土屋政二)
 江戸川区郷土資料集 第九集(江戸川区郷土資料室)
 日本そば展出品目録(同右)
 文化財調査報告 第三集(上尾市教育委員会)
 上尾市史料 第九集(上尾図書館)
 西川町史編集資料 第三号(二)(西川町教育委員会)
 新治村史料集 第六集(新治村史料集刊行会)
 憲政史特別展 第一回展示目録(憲政記念館)
 苫小牧市史 上・下・別巻 資料編 第一・二巻
 大館市史 第二巻
 (福島県) 矢吹町史
 豊橋市史 第七巻
 改訂天理市史 上・下巻 史料編 第一・三・別巻
 立教大学所蔵文書目録 4(立教大学)

日本史研究室)

(和歌山県) 岩出町誌

(島根県) 西郷町誌 上・下巻

鹿児島県史料 忠義公史料 第五巻

沖繩県史 第一・別巻

昭和五十三年度 (一)

(香川県) 綾歌町史

鹿児島県史料 西南戦争 第一巻 旧記・

雑誌追録 八

特別展覧会房総の化石 (千葉県立上総博

物館)

教学叢書 1 (金光教学研究所)

商店界 78・5 (誠文堂新光社)

目で見える泉崎村のあゆみ (箭内正次

三原市史 第一・四巻

(愛媛県) 長浜町誌

(愛媛県) 肱川町誌

高知県史 民俗編

長崎県教育史 資料編

平良市史 第五巻

山形県史 資料編十九

山形市史資料 第五十号

上山市史資料 第二十三集

村山市史編集資料 第三号

天童市史編集資料 第9号

(福島県) 熱塩加納村史 第3巻

大田区史 資料編 平川家文書 四

東京都議会史 第六巻

同和教育史 兵庫県関係 史料 第三巻

(兵庫県同和教育史研究委員会)

資料報告書 第五集 (高知県立郷土文化

会館)

紀家集 (宮内庁書陵部)

皇室制度史料 太上天皇一 (同右)

図書寮叢刊 後崇光院歌合詠草類 (同右)

からくり——人形と文化—— (名古屋市

博物館)

正倉院宝物複製特別展 (同右)

埼玉県立博物館展示解説 古美術

南方土俗展目録 (市立函館博物館)

江戸川区の動植物展摘要 (江戸川区郷土

資料室)

中根家文書展 (岡崎市郷土館)

円空・学秀伝 (青森県立郷土館)

古世界地図展 (三重県立博物館)

三重考古展 (同右)

宮崎県郷土資料利用の手引 第1・3集

(宮崎県立図書館)

中越地方の城館跡 (花ヶ崎盛明)

近世土佐と民権思想 (山本大)

木戸伊豆守忠朝小傳 (富田勝治)

呉市史 第四巻

群馬県史 資料編 18

長野県史 近世史料編 第二巻 (二)

東信地方

若狭人物叢書 6 面山和尚 (小浜市立

図書館)

所沢市文化財調査報告書 第2集 (所沢

市教育委員会)

青森県立郷土館調査報告 第3集

青森県民俗資料図録 第5集 (青森県立

郷土館)

朝日新聞記事集成 第五集 (枚方市史編

纂委員会)

枚方市史資料 第三集

市立旭川郷土博物館所蔵品目録 VI

北海学園大学増加図書目録 第12号

北星学園大学図書館増加図書目録 第4

号

件名目録 VII (北海道立教育研究所)

水野葉舟——三里塚の文人たち—— (成

田山史料館)

福島県議会百年資料展

類縁機関名簿 1977年版 (東京都立

中央図書館)

生徒と先生のための博物館学習 (秋田県

立博物館)

最上町史編集資料 第一号

渋谷区の文化財 文化財・史跡編 その

一 (渋谷区)

高隆寺内発見の中世墓跡 (岡崎市教育委

員会)

八潮の民家と社寺建築 (八潮市)

佐賀県有田町天神森古窯址群調査概報

(有田町教育委員会)

川内川上流地区有形民俗資料調査報告書

(鹿児島県明治百年記念館建設調査室)

沖繩県市町村別大字・小字名集 (沖繩県

土地調査事務局)

(茨城県) 出島村史 (続編)

吹田市史 第五巻

河内長野市史 第六巻

(石川県) 富来町史 通史編

須賀川市史 七

名古屋叢書 索引 (名古屋市教育委員会)

敦賀市史 史料編 第二巻

大和市史 第四巻

小山市史 民俗編

浅草寺日記 第一巻 (金龍山浅草寺)

八戸市史 史料編 近世6

岐阜市史 史料編 近世二

日本の壺一〇〇 (サントリ美術館)

江戸時代の工芸 (浦和市郷土博物館)

明治大正図誌 4・15 (筑摩書房)

日本事情シリーズ東京 (日本語教育学会)

北海道開拓記念館研究報告 4

北海道開拓記念館調査報告 15

解題書目 第九集 (青森県立図書館)

仙台市文化財調査報告書 第13集 (仙台

市教育委員会)

山形市史資料 第51号

港区歳時記 四 (東京都港区立三田図書

館)

近代沿革図集 別冊II (同右)

久留米の昔話を聞く IX (東久留米市

東久留米市史料 第4・5号 (東久留米

市教育委員会)

(以下次号)

叢報

○昭和五三年度事業（その一）

一、史料の収集

今年度のマイクロ・フィルムによる史料収集は、七月一〇日から一三日にかけて、下総国相馬郡川原代村池端木村家文書（現在竜ヶ崎市内）を調査し、一三リール（六三六ニコマ）を収録したほか、山城国淀川家系中田辺家文書、出羽国久保田藩城下秋田上肴町山田家文書などの撮影を予定している。

二、史料の所在調査

本年度の第一次所在調査は、一〇月二八日～三一日の間、山梨県南巨摩郡鰍沢町原田公房家および同県東八代郡八代町武川仁家の二件、第二次調査としては姫路市酒井家文書（日次未定）を対象として実施を予定している。いずれも現地の方々のご協力を仰いで行なうものである。（調査の概要報告は次号に掲載の予定）

三、第二四回近世史料取扱講習会

本年度の講習会は次の通り開催される。

第一会場 京都府立総合資料館（京都府）
市 一〇月二三日～二七日

第二会場 国文学研究資料館（東京都）
市 十一月六日～一〇日

四、定期刊行物の発行予定

1 『史料館所蔵史料目録』第二十九集

に「伊豆国君沢郡内浦史料」を、第三十集に「近江国蒲生郡八幡町山形屋西川家文書」・「三井高維集史料」目録を収録の予定。

2 『史料館研究紀要』第一一〇号

3 『史料館報』本号および第三〇号（五四年三月）を刊行

○評議員会

本年度評議員会総会が、五三年七月一四日に当館中会議室において開催され、管理運営の概況、五四年度概算要求、本年の事業などについての議事が評議された。なお、任期満了に伴う評議員の改選があり、史料部会関係は次の各氏である（敬称略・五十音順。任期〓昭和五三・七・一～五五・六・三〇）

石井良助（東京大学名誉教授）、日田甚五郎（国学院大学教授）、児玉幸多（学習院大学長）、小葉田淳（京都大学名誉教授）、小林清治（福島大学教授）、佐藤喜代治（フェリス学院教授）、豊田武（法政大学教授）、野間光辰（皇学館大学教授）、秀村達三（九州大学教授）、宝月圭吾（東京大学名誉教授）、松田智雄（図書館短期大学長、山本達郎（国際基督教大学教授）

○受託史料の返還

昭和四七年以来、当館が保管を委嘱されてきた「伊達家中小野家文書」は、今年八月三一日付を以って受託契約を解

除した（該文書の概要については、本紙一九〇〓昭和四八年一〇月刊に収載）。

なお、同文書は九月一日付で原蔵者へ返却の後、仙台市立博物館へ寄託手続の予定である。これは、同文書の中心をなす小野莊五郎の出身地仙台を保管地としたいという原蔵者のご希望に基づくものである。

○研究会

第二〇回（五三・三・二八）

受託史料の目録化の問題・史料翻刻について

第二一回（五三・五・三〇）

長期計画委員会再発足のために

——旧長期委員会の経過報告——

第二二回（五三・六・二二）

マイクロ・フィルムによる史料収集の基本方針をめぐって

第二三回（五三・七・一八）

近世史料論

第二四回（五三・九・一四）

翻刻史料の選定について

○人事異動

◆昭和五三年四月一日付

新任（第二史料室長）教授安沢秀一（前桃山学院大学経済学部教授）

新任（第二史料室長）教授安沢秀一（前桃山学院大学経済学部教授）

新任 助手 笠谷和比古

第二史料室長兼第三史料室長 藤村潤一郎

第二史料室長の併任を解除

おし
らせ
封鎖史料の解除について

昨年の書庫移動の際に、書架の一部が未着のため、一部の史料が箱詰めのまま封鎖状態が残っていましたが、去る七月に書架の増設工事が完了し、封鎖史料の開梱も終え、八月末から公開できるところになりましたのでお知らせします。今回開梱した史料は、梱包してから約二年というわれわれの予想を大幅に上廻るものでした。これらの史料は、従来も利用度の低いものを選ぶように配慮したつもりですが、長期間にわたり利用を制限する結果となったことを、改めてお詫びいたします。

史料館報 第二九号

昭和五三年九月三〇日発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ二六ノ一〇

国文学研究資料館内

国立史料館

電話（七八五）七三二（代）

印刷所

東京都文京区小石川一ノ三ノ七

勝美印刷株式会社

電話（八二二）五二〇一（代）